

## シリア・パルミラ遺跡 129-b 号墓の復元的研究

石川 慎治\*・西藤 清秀\*\*・濱崎 一志\*\*\*

## The Study on the Reconstruction of No. 129-b House Tomb in Palmyra, Syria

Shinji ISHIKAWA\*, Kiyohide SAITO\*\* and Kazushi HAMAZAKI\*\*\*

## Abstract

Palmyra is a city located in the center of the Syrian Desert. It was a caravan city that prospered most on the Silk Road from the first century B.C. to the third century A.D. There are still many remains in Palmyra.

The research of No. 129-b House Tomb has been continued since 2006. This study introduces the current result of the reconstructing study on No. 129-b House Tomb. The following six points will be assumed.

- 1) At No. 129-b House Tomb, a square of side was about 11 m, and the height was about 14 m. The front of the tomb was on the west and there were two entrances. The main entrance faces to the west on the first floor and the second one faces to the south on the basement floor.
- 2) The west entrance had a door of the inward opening, and the detail of the south entrance is unclear.
- 3) On the east, the south and the north walls of the tomb, there were two kinds of pseudo-windows in three places on each wall.
- 4) The first floor of the tomb was comprised of cross-shaped space having loculi, a courtyard in the center and staircase part on the northwest corner.
- 5) The basement of the tomb had a passage of the north and south axis to the center part, and the basement floor was at the position that was lower than the podium.
- 6) The second floor in the tomb was connected to the first floor with the staircase of the northwest corner.

## 1 はじめに

パルミラは、シリア・アラブ共和国の首都ダマスカスから北東に 230 km、シリア砂漠の中央に位置する都市である。このようなパルミラは、紀元前 1 世紀から紀元後 3 世紀にシルクロードでもっとも繁栄した隊商都市であり、その当時の遺跡が今も数多く残っている（図 1）。現在、「奈良・パルミラ遺跡発掘調査団」は、家屋墓に焦点を合わせたパルミラの葬制とその社会的背景についての総合的な研究を実施するため、2005年の予備調査を踏まえて2006年から本格的にパルミラ遺跡北墓地にある 129-b 号墓（図 2）の調査を行っている<sup>1)</sup>。

本稿は、これまで行った 129-b 号墓の調査の中で、特に建築学による復元的研究のこれまでの成果について紹介する。

\* 滋賀県立大学 助教（〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部）  
Assistant Professor, The University of Shiga Prefecture

\*\* 奈良県立橿原考古学研究所 副所長（〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地 奈良県立橿原考古学研究所）  
Deputy Director, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture

\*\*\* 滋賀県立大学 教授（〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部）  
Professor, The University of Shiga Prefecture

1) 西藤清秀：「シリア・パルミラ 129-b 号墓調査概観」『第17回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』, pp. 63-71, 2010

## 2 129-b 号墓の概要

129-b 号墓は、パルミラ遺跡の都市部北側にある北墓地に位置する（図3）。この墓は、3世紀末にローマ皇帝ディオクレティアヌスによって建造された城壁（ゼノビア・ウォール）に取り込まれている。また、この城壁はイスラーム期にも防御壁としての役割を果たしている。

かつてのパルミラの墓は、一般的に塔墓（紀元前1世紀～紀元1世紀，図4），地下墓（紀元1～2世紀，図5），家屋墓（紀元2～3世紀，図6）という3つの異なる形態が存在し、時間的推移とともに変化していくことが知られているが、129-b 号墓は神殿風の形態をしている家屋墓と考えられている。この墓は長らく倒壊した状況であったが、かつての柱や壁の部材が位置関係を維持しながら倒壊していたため、往時の姿が復元可能と思われた。

なお、これまで129-b 号墓については、Andreas Schmidt-Colinet による36号墓（図7）という家屋墓の調査<sup>2)</sup>に関連して概略的な129-b 号墓の推定復元図（図8）が1992年に作成されているが、本格的な発掘調査にまでは至らなかった。

## 3 129-b 号墓の建築学的復元

### 3-1 調査の概要

129-b 号墓の調査は、まず、遺構のレーザー計測<sup>3)</sup>（図9）によって倒壊した部材の位置情報を確認した後、クレーンにて部材を取り上げている。その後、部材ごとの詳細な計測を行い、その部材が家屋墓のどの部分のものであるかを一つずつ推定しているところである。推定した石材については、外部部材と思われる石材（東・西・南・北面）、内部部材と思われる石材を5カ所に分けて仮置きしている（図10）。なお、2010年の調査終了時点では、基壇内部に落ち込んでいた石材のおよそ3/4程度の取り上げが終了し、地階の床面と棺柩を構成する部材が出てきた状態となった。

以下、調査途中ではあるが、現時点までの推定復元された129-b 号墓を外部・内部に分けて紹介することとする。

### 3-2 129-b 号墓・外部の推定復元

上記のような調査を踏まえて推定復元された129-b 号墓の外部については、図11～13のようになる。

129-b 号墓は、基壇下部からの高さが約14 m、1辺が約11 mの正方形の平面をした構造物であり、西面を正面とする。その西面にあった入口は、まぐさ石（図14）の形状より内開きの2枚の扉によって構成されていることが明らかとなった。ただし、扉はまだ出土していないため、詳細は分かっていない。また、西面には入口に上がるための階段が取り付くが、この階段は正面方向（西面）と側面方向（南・北面）では段数が異なっている（図11, 15）。これは、129-b 号墓が小規模なため、正面から見た墓全体と階段のバランスからこのようになったと推測される。また、入口は西面ばかりでなく、地階への入口が南面の基壇中央に設けられていたことも分かっている。

2) Andreas Schmidt-Colinet: 『Das Tempelgrab Nr. 36 in Palmyra』, Philipp von Zabern, pp. 42-64, 1992

3) レーザー計測については、株式会社アコードから技術協力を受けている。

る(図11, 16)。この入口のまぐさ石には、2行のギリシア語碑文が刻まれていた。この碑文は劣化が著しいために判読できない部分もあるが、この墓がローマ人に関わっていることが理解できた<sup>4)</sup>。

一方、129-b 号墓の立面は、下から基壇、柱礎、柱(図17)、柱頭(図18)、エンタブラチュア(アーキトレーヴ(図18)・フリーズ・コーニス)、屋根、という構成である。ただ、屋根は両妻側に破風(図19)があることは分かっているが、これまでの発掘調査では瓦がほとんど出土していないことから、破風以外の部分がどのようなになっていたかは不明である。また、東・南・北の各面ともに3つの疑似窓がつくが、柱間の中央と両端では窓枠上部の意匠が異なる。中央の窓枠上部が丸屋根(図20)であるのに対し、両端の窓枠上部は三角屋根(図21)である。

また、状態のよい部材の実測値から主要部材のオーダーを復元すると、図11ようになる。これを見ると、129-b 号墓の柱形は、角柱の両脇に1/4円柱が取り付けような形となっているが、今回はこの柱形の角柱の幅を1モジュール( $a=750\text{ mm}$ )としてオーダーの復元を行った。まず、水平方向を見ると、柱形の角柱の幅： $a$ (750 mm)、1/4円柱の幅： $1/2 \cdot a$ (375 mm)、となる。また、柱間がすべて同じであると仮定すると、柱形の内法： $2 \cdot 1/2 \cdot a$ (1875 mm)、になるため、柱の真々の寸法： $4 \cdot 1/2 \cdot a$ (3375 mm)となる。次に、鉛直方向を見ると、基壇： $3 \cdot 1/4 \cdot a$ (2437.5 mm)、柱： $10 a$ (7500 mm)、アーキトレーヴ： $11/12 \cdot a$ (687.5 mm)、フリーズ： $7/10 \cdot a$ (525 mm)、コーニス： $1/2 \cdot a$ (375 mm)、となっている<sup>5)</sup>。なお、下から1、2段目柱身部材の高さは、出土状況などから他の段の柱身部材よりも $1/8 \cdot a$ (93.75 mm)ほど高い。柱礎は高さが $3/4 \cdot a$ (562.5 mm)であり、そのうち礎盤は $1/4 \cdot a$ (187.5 mm)となっている。また、西側の階段は、正面方向(12段)では踏面： $3/4 \cdot a$ (562.5 mm)、蹴上： $1/4 \cdot a$ (187.5 mm)、側面方向(6段)では踏面・蹴上： $1/2 \cdot a$ (375 mm)、となる。

### 3-3 129-b 号墓・内部の推定復元

129-b 号墓の内部については墓外部ほど調査が進んでいないが、石材取り上げ時の状況などから2008年～2010年に取り上げられた石材の多くが主に1階以上の部分を構成する石材だと推定された(図22～27)。ただ、地表面にさらされていた石材に比べ、地中にあった石材は風化が進んでいるために判別のつきにくいものも見受けられたが、パルミラにおける他の家屋墓の事例なども参考にしながら129-b 号墓・内部の推定復元を行った。このようにして推定された129-b 号墓の内部は図28のようになる。

これによると、1階部分は、西面の入口を入ると、十字形の空間部分と四隅に棺柩・階段室で構成される平面であったと推定された。墓中央部は二つの角柱をあわせた柱形(図24)が四つ建ち、その上部を口の字に梁(図25)が結んだ形で1辺約3.1 mの中庭が構成される。また、この梁と同じ装飾が南北面の柱間中央にある疑似窓の窓枠下部の内部(図29, 30)にも見られることから、この梁は棺柩前の空間上部にも口の字状にまわっていたと推測された。なお、この梁の端部の形状より、両脇の梁で囲まれた部分(北側・南側)は、中央のものより小さくなることが明らかとなった(図31)。棺柩は柩縦枠に残る痕跡より、柩一つの高さが約0.5 mであることが分かったが、棺柩の層数・列数についてはまだよく分かっていない。なお、東・南・北面内壁の中央部についても、何

4) 碑文には、Gaius Julius Bassus というローマ人の名がみられる。

5) ただし、現在、Dr. Christine Ertel からコーニスについて指摘を受けており、今後の詳細な検討により変更されることがありうる。

らかの装飾が施されていたと思われるが、現在検討中である。また、1階の床中央南北列は、長さ2.8m、幅1.2~1.4m、厚さ0.35mの石材が並べられていたことがわかっており（図32）、他の部分においても同様であったと考えられる。

地階部分は、床面が基壇上部（1階床面上部）から約2.8m下に位置しており、外側からみえる基壇下部よりも下になる（図33）。なお、パルミラの他の家屋墓の事例を考慮すると、北西隅に1階と地階を繋ぐ階段室があったと思われるが、それを指し示す部材は今のところ確認できていない。また、2階の存在については、①柱・壁を構成する上部石材内側の表面仕上げが丁寧である、②棺柩などにより1階から見上げた時に柱・壁を構成する上部石材の四隅が死角になる、ことなどを考慮すると、2階は存在していたと推測できる。この場合、前述の通り、北西隅に1階と2階を繋ぐ階段室があったと思われる。

#### 4 ま と め

このように推定復元された129-b号墓の建築的特徴は、下記のようにまとめることができる。

- ・1辺約11m、基壇下部からの高さ約14m、西面を正面とし、西面に1階入口、南面に地階入口を持つ。
- ・西面入口は内開きの2枚扉で構成されるが、南面入口の詳細は不明である。
- ・東・南・北面では、各面とも2種類3カ所の疑似窓が設けられる。
- ・1階は中央に中庭を持つ十字形の空間部分と四隅に棺柩・階段室で構成される平面である。
- ・地階は南北方向中央に通路があり、その床面は基壇下部よりも低い位置にある。
- ・2階は存在し、北西隅の階段室で1階と繋がっていた。

ここで、パルミラの主要な家屋墓と129-b号墓を比較すると、同規模の家屋墓と各種数値が近似していることが分かる（表1）。

ただし、他の家屋墓と異なる点もいくつか見受けられた。まず、パルミラの他の家屋墓の外観を見ると、図34のように、柱は角柱あるいは丸柱で構成されているのに対し、129-b号墓は角柱の両脇に1/4円柱が取り付け形となっている。このような重厚な外観はパルミラの他の家屋墓では見られないが、その理由については今後の検討課題である。次に、129-b号墓の1階が東西方向に主軸を持つ平面であるのに対し、地階は入口が南面にあり、南北方向に主軸を持つ平面であると推定されている。一方、パルミラの他の家屋墓では、入口の位置が判明している事例が少ないものの、1階と地階の主軸は同じ例ばかりである（表1）。1階と地階の主軸が直交している129-b号墓は珍しい事例といえるが、その理由についても今後検討していきたい。

最後に、129-b号墓の調査はまだ完了していないため、今後の調査によって、今回推定復元された129-b号墓について変更がありうることを記しておく。なお、本研究は、日本学術振興財団科学研究補助金（A）「古代パルミラの葬制の変化と社会的背景にかかわる総合的研究」（課題番号：23251018、平成23~27年度、研究代表者：西藤清秀）の成果の一部である。

#### <参考文献リスト>

Andreas Schmidt-Colinet  
1992 『Das Tempelgrab Nr. 36 in Palmyra』, Philipp von Zabern, Mainz

- 2005 『Palmyra Kulturbeggnung im Grenzdereich』, Philipp von Zabern, Mainz
- 濱崎一志, 石川慎治, 西藤清秀  
2008 「パルミラ遺跡北墓地 129-b 号墓の復元について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, F-2, pp. 521-522, 日本建築学会
- Kiyohide Saito  
2010 「Excavation of No. 129-b House Tomb at the North Necropolis in Palmyra」『Chronique Archaeologique en Syrie』, pp. 243-259, Direction Generale des Antiquites et des Muses, Damascus
- 西藤清秀  
2010 「シリア・パルミラ 129-b 号墓調査概観」『第17回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』, pp. 63-71, ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
- Kiyohide Saito and Aumar As'sad  
2011 「Excavation of No. 129-b House Tomb at the North Necropolis in Palmyra — Cooperated Research of the Syria and Nara Palmyra Archaeological Mission of Japan in 2009」『Chronique Archeologique en Syrie — Excavation Reports 2009』, pp. 169-188, Direction Generale des Antiquites et des Musees, Damascus
- 西藤清秀, 濱崎一志, 中橋孝博, 吉村和昭, 佐藤重聖, 石川慎治, 佐々木玉季  
2009 「シリア・パルミラ遺跡の家屋墓を掘る—北墓地 129-b 号墓の調査2008—」『第16回西アジア発掘調査報告会報告集』, pp. 95-100, 日本西アジア考古学会
- 西藤清秀, 中橋孝博, 吉村和昭, 石川慎治, 佐藤重聖, 佐々木玉季  
2010 「シリア, パルミラ遺跡の家屋墓と乳児墓を掘る—北墓地 129-b 号墓の調査2009—」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』, pp. 107-112, 日本西アジア考古学会
- 西藤清秀, 中橋孝博, 濱崎一志, 石川慎治, 佐藤重聖, 佐々木玉季  
2011 「パルミラの葬制の解明—シリア・パルミラ北墓地 129-b 号墓の調査2010—」『第18回西アジア発掘調査報告会報告集』, pp. 110-115, 日本西アジア考古学会
- 石川慎治, 濱崎一志, 西藤清秀  
2008 「パルミラ遺跡北墓地 129-b 号墓のオーダーについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, F-2, pp. 523-524, 日本建築学会
- シルクロード学研究センター編  
1998 『シルクロード学研究5-2 隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究 (図版編)』, シルクロード学研究センター

図1 パルミラ遺跡<sup>6)</sup>

図2 129-b 号墓 (2006年)

6) Andreas Schmidt-Colinet : 『Palmyra Kulturbeggnung im Grenzdereich』, Philipp von Zabern, 2005

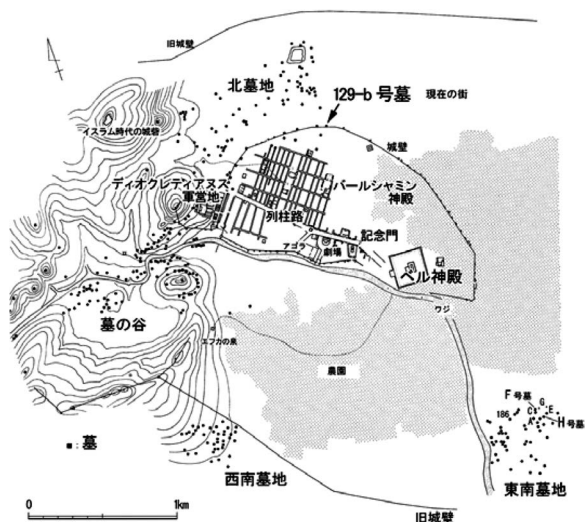


図3 パルミラ遺跡における129-b号墓の位置



図4 塔墓



図5 地下墓<sup>7)</sup>



図6 家屋墓 (86号墓)



図7 36号墓

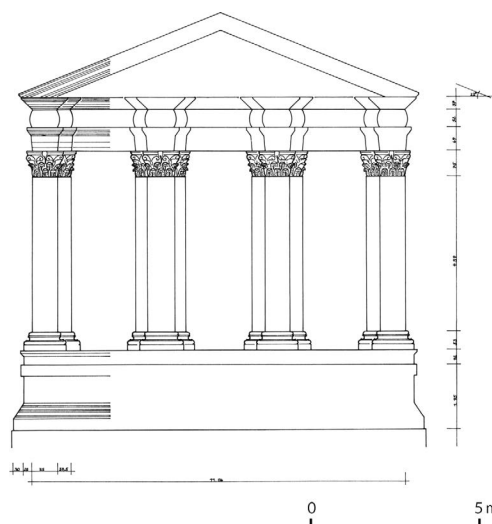


図8 Schmidt-Colinet (1992) による129-b号墓推定復元図(東立面図)<sup>8)</sup>

7) シルクロード学研究センター編：『シルクロード学研究5-2 隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究（図版編）』，シルクロード学研究センター，1998

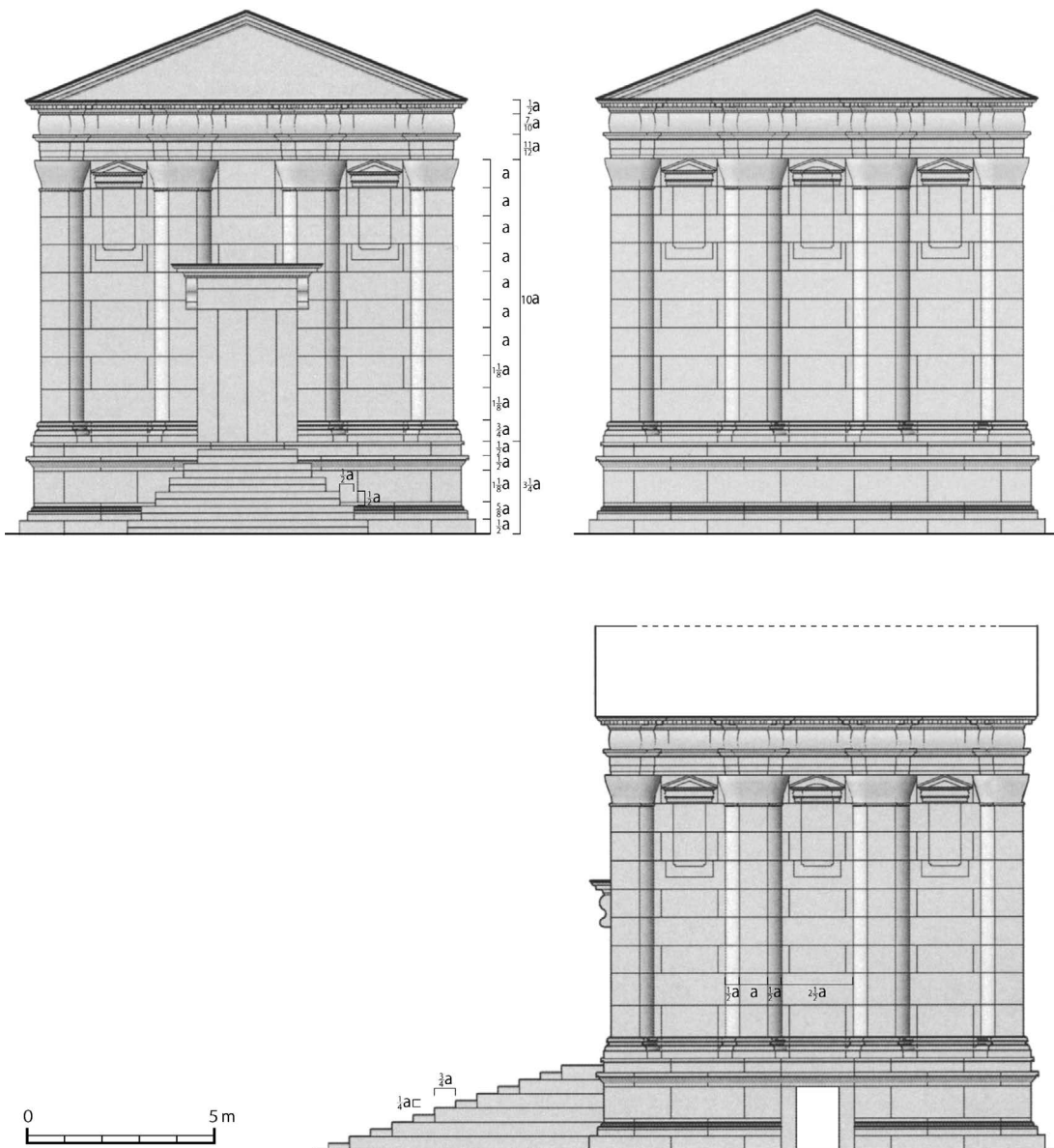
8) 『Das Tempelgrab Nr. 36 in Palmyra』(Andreas Schmidt-Colinet, Philipp von Zabern, 1992) のp. 61 Abb. 29の図を加筆修正した。



図9 レーザー計測



図10 仮置きされた石材



※ 柱形の角柱の幅を1モジュール ( $a=750\text{mm}$ ) とした。

図11 129-b 号墓推定復元図 (左上：西立面図, 右上：東立面図, 下：南立面図)

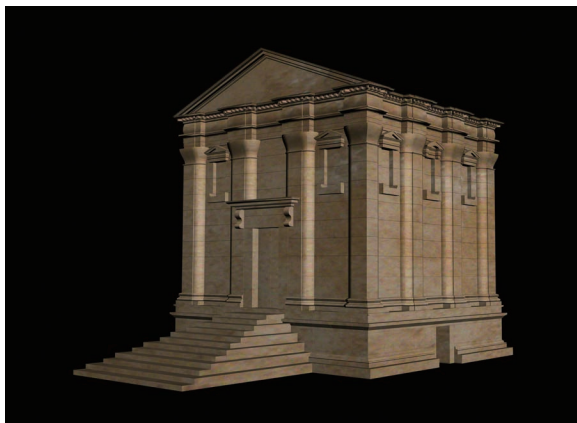


図12 129-b号墓推定復元CG(南西方向から)

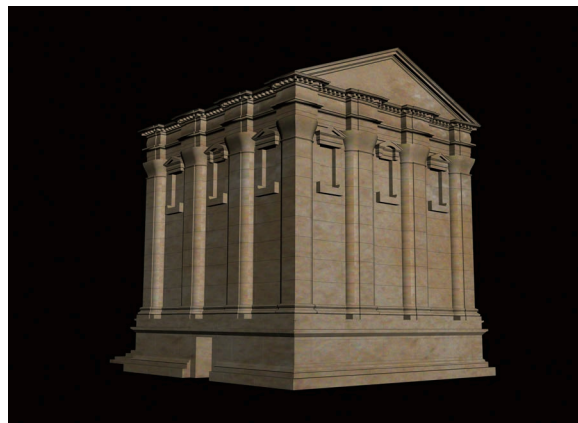


図13 129-b号墓推定復元CG(南東方向から)



図14 まぐさ石



図15 階段出土状況



図16 南面入口(内部から)



図17 柱





図18 柱頭・アーキトレーズ



図19 破風



図20 窓枠上部 (柱間中央)



図21 窓枠上部 (柱間両端)



図22 内部・基壇 (中庭部分)



図23 内部・柱頭 (中庭部分)



図24 内部・柱（中庭部分）

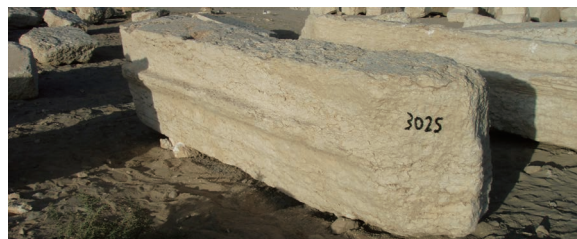


図25 内部・梁〈アーキトレーヴ+フリーズ〉（中庭部分）



図26 内部・梁〈コーニス〉（中庭部分）



図27 内部・柱（棺棚部分）

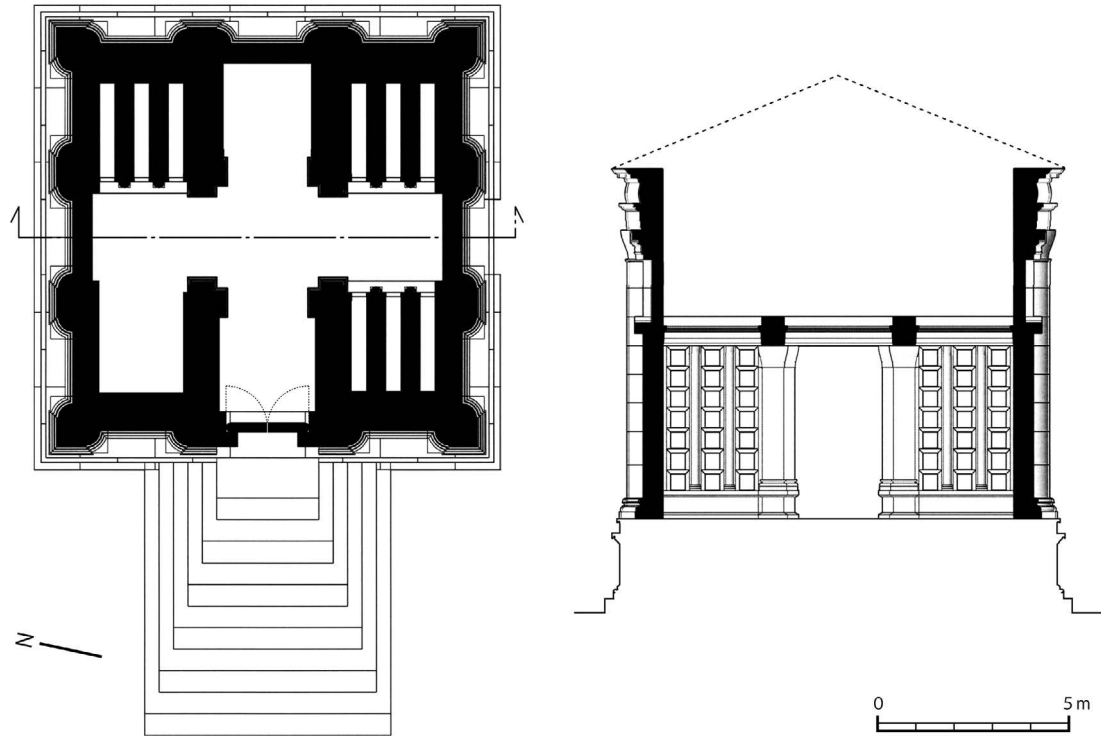


図28 129-b 号墓推定復元図 (左：1階平面図, 右：断面図)



図29 窗枠下部 (南面柱間中央・外部)



図30 窗枠下部 (南面柱間中央・内部)

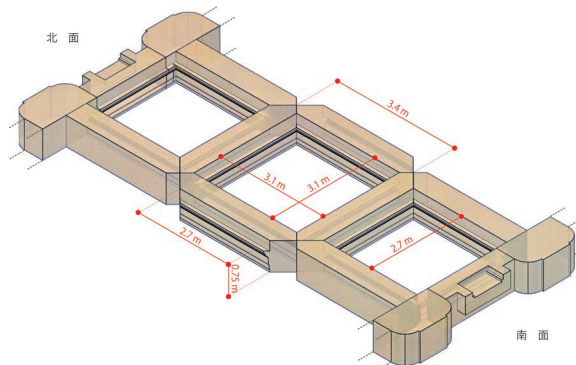


図31 墓内部の梁



図32 1階床板出土状況



図33 地階床出土状況 (南面入口付近)

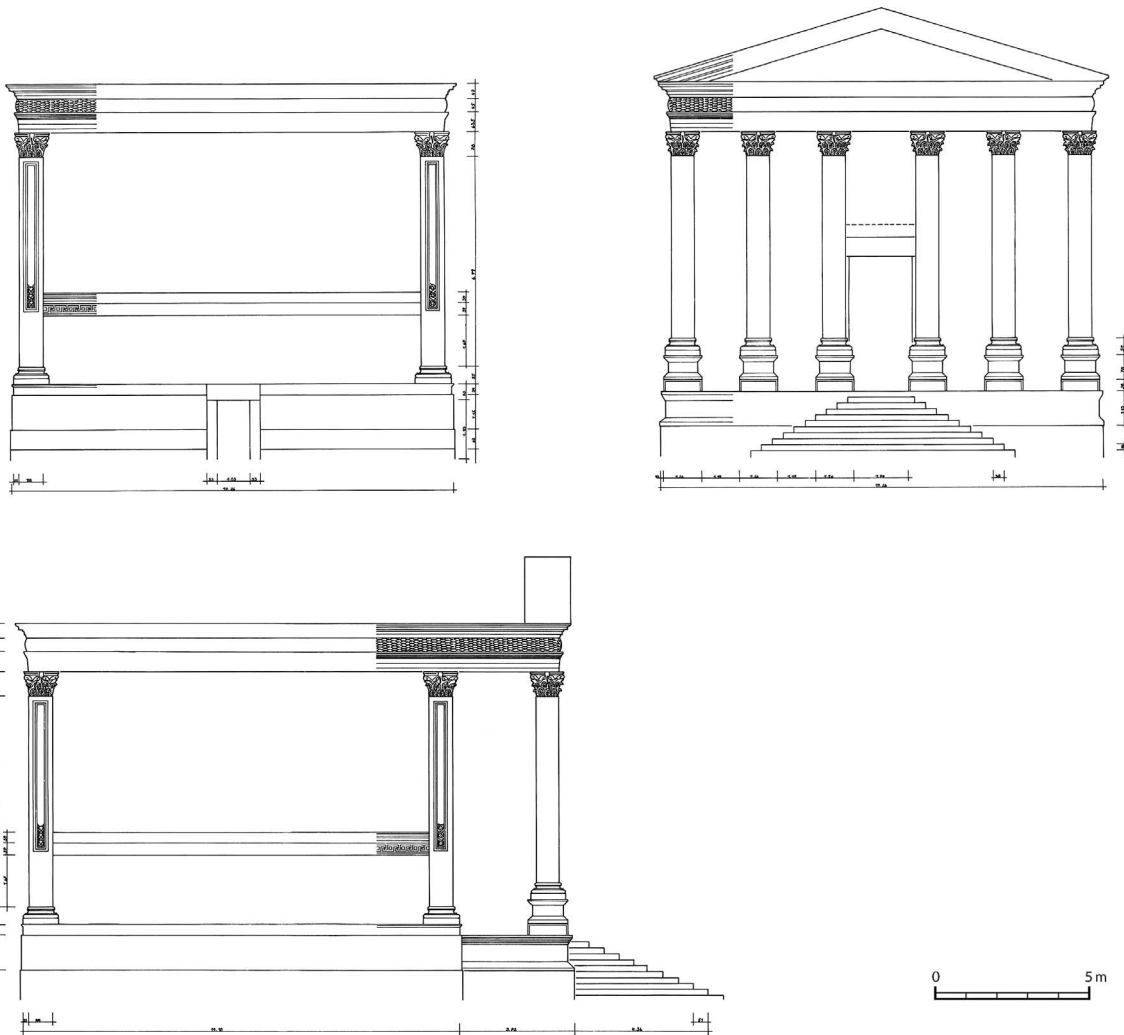


図34 Schmidt-Colinet (1992) による86号墓推定復元図 (左上：西立面図, 右上：東立面図, 下：南立面図)<sup>9)</sup>

9) 『Das Tempelgrab Nr. 36 in Palmyra』 (Andreas Schmidt-Colinet, Philipp von Zabern, 1992) の pp. 58-60 の Abb. 28 a, 28 b, 28 c の図を加筆修正した。

表1 パルミラ遺跡における家屋墓の各種データ<sup>10)</sup>

墓番号	規模		位置	柱幅 (m)	礎盤幅 (m)	柱身高さ (m)	〈柱礎+柱身〉 高さ(m)	柱身高さ/柱幅 (理論値)	(柱礎+柱身高さ)/柱幅 (理論値)	入口の位置	
	間口(m)	奥行(m) (全体)								1階	地階
173	10.50	11.35	北	0.45-0.51	0.65	3.42	3.80	6.7-7.8 (7)	7.45-8.44 (8)	東	西
174	10.53	10.86	北	0.64	1.00					南	
150	10.70	11.82	北	0.76	1.16	6.29	6.85	8.27 (8・1/4)	9.0 (9)	西	東
173-b	10.81	11.77	北	0.66	1.06	6.725	7.10	10.18 (10・1/4)	10.75 (10・3/4)	東	
173-a	10.90	12.22	北	0.74	1.14	6.345	6.885	8.57 (8・1/2)	9.25 (9・1/4)		西
86-a	10.95	-	北	0.705	1.11	6.39	6.88	9.06 (9)	9.75 (9・3/4)		
129-b (1992年)	11.56	-	北	0.75	1.25	4.59	5.12	6.12 (6)	6.82 (6・3/4)		
129-b (2012年)	11.25	11.25	北	0.75	1.125	6.1875	6.75	8.25 (8・1/4)	9.0 (9)	西	南
76	12.00	12.60	西	0.75	1.11	6.07	6.585	8.09 (8)	8.75 (8・3/4)	東	
43	12.70	12.25 (15.24)	西	0.86	1.18	4.43	4.99	5.15 (5)	5.8 (5・3/4)	北	
38-b	12.92	-	西								
85-b	13.23	13.35 (17.38)	西							北	
173-c	14.16	16.34 (18.69)	北	0.70	1.04	5.68	6.13	8.11 (8)	8.75 (8・3/4)	東	
86	14.26	14.10 (17.82)	北	0.78	1.2	6.79	7.34	8.70 (8・3/4)	9.41 (9・1/2)	東	西
38	15.10	-	西	0.68						北	
173-d	16.66	-	北	0.84	1.34	7.00	7.585	8.33 (8・1/4)	9.0 (9)	南	
36	18.03	18.03	西	0.75	1.125	7.525	8.085	10.0 (10)	10.78 (10・3/4)	北	
38-a	19.02	-	西								
186	19.24	19.35 (22.30)	南								

10) 『Das Tempelgrab Nr. 36 in Palmyra』 (Andreas Schmidt-Colinet, Philipp von Zabern, 1992) の p 52, 62 のデータをもとに、今回の調査結果を加えた形で作成した。なお、表中の「規模」については、間口・奥行ともに「柱礎の礎盤外側間の距離」である。